

研究

横川先生と佐伯 (七)

「郷土の研究」に学ぶもの

佐伯 山本 保

一、郷土の自然、二、郷土の災害について触れてきました。が、今回は、郷土の農牧業について紹介いたします。先人の労苦と生活の知恵をお読みとり下さい。

三、郷土の農牧業 (横川末吉「郷土の研究」)

1. 稲作

1. 開拓地

新地とよばれるたんぼを調べてみますと、水立村須苗木、下堅田村の津志河内、小島、そして蛇崎(同上堅田村)、女島、長島等、いづれも広く分布しています。

これは、ほとんど、江戸時代に開拓されたもので、開拓前は、ちようど今の干がたのようであつたと思ひます。

干潮には、広々としたどろぬ砂の浜となる所で、旧海軍用地(現在興人在仙支社)沖の、佐伯の人が好んで潮干狩りに行く所と想像すれば、わかると思ひます。

有明海や児島湾(岡山県)のようにな大仕舞け

ではないが、私たちの祖先も、やはり、堤防を築き、みぞを掘って、干拓しました。

堤防に設けた水を調節する「いぶ」とよばれる装置などは、なかなかおもしろくてきています。干拓事業を実施した人々の名をその土地につけて記念しているのは、生きた歴史と思ひます。

2. 河道利用

古い河道も、よく田に利用されています。長瀬と龍護寺との間に表の作れないう湿地が、南側の藁田より一丈ぐらゐ低く、百歩近い幅で続いているのは、そのよい例です。

鶴岡の脇の前には、川田とよばれる田があります。私はたぶんこれも番匠川の旧河道だと思ひます。それは、脇の山のふもとに珍らしい弓形の線が、川の側方からの侵蝕より外には考えられないからです。

蛇崎にも、えびせき新地というのがあり、さき島と吉手新地との間に、ばつきり堅田川の一分流の旧河道があつたことを示しています。

しかし、田になる前に、たいてい長く畑として利用されていゝたのではないかと思ひます。その畑で畑で、おわ・ひえ・さび・陸稻などを作り、米食は一般には普及していかつたと思ひます。私は、灌漑が水田を造るのに一番大切な条件と思ひます。

近ごろ、床木(弥生町)では赤土で粘土の盤を作つたり、ポンプで揚水したりして、水田作りには骨を折つていますが、なかなか一通りの苦勞ではありませぬ。

次に灌漑や水田化について調査したものを発

表しませう。

八、井堰

中野村では、小川入口で番匠川をせき止め、
 下三股まで約五km以上、山に沿い、古ようど地
 面の等高線のように水を引いています。夏の暑
 い日には、水田の灌漑をかねて、納涼の行水も
 行なわれます。こんな例は、番匠川、久留須川、
 井崎川、堅田川、大越川のそれぞれで、ほとん
 ど二、三kmごとに発見されます。

みな、苦心の物語が伝えられているでしょう。
 ありがたい祖先のおかげです。

上野村の小田の取入口は、せきよりも約五
 十m上流にあって、わざわざ一志止められた水
 を、小さい川で逆流させようと、用水路に導
 いています。洪水の時、流れこぶ土砂が、取り
 入れ口を埋めないようにするためでしょうか。

こんな例を見るたびに、私は、その時々の人
 たちが、みな全力を尽くしてきたと思われて、
 感心します。

協力によらねばできない、こんな仕事は、た
 いてい武士や庄屋の指導によって行なわれまし
 た。今と違った社会組織のもとに、違った方法
 で計画され、実行されたものです。

江戸時代の中頃以後、小林九左衛門が上野村
 に鬼ヶ瀬井堰、出納藤左衛門が切畑村に常盤井
 堰、深矢藤氏が鶴岡に小田井堰、佐藤甚兵衛が
 下直見に、それぞれ灌漑したのが、その事例に
 なるわけです。

研究によれば、灌漑のなめに協力する組織が
 発展して、ついに国家というものができるとい

になつたということですが。

明治以後は、たいてい耕地整理組合という名
 称の、もつと農民本位の組織によって行なわれ
 ました。

番匠川の一帯下流の上岡のいせき(高島井堰)
 は、近代的で、簡短・久部はその恩恵をうけて
 います。小さい例ですが、皇岡村の蔵小野で、
 二所余りの畑を田に換えた用水路の完成の喜び
 を記録した記念碑も見ました。

三、ため池

ため池による灌漑は、この地方には少ないよ
 うです。

瀬戸内海沿岸地方には、ため池がずいぶんた
 くさんあります。

中芳島には、五mぐらいの直径のため池があ
 つて、これから水を回しく及んでいます。

木立村の大野の水田化事業は、ため池を中心
 にして、明治から大正、昭和と三代にわたる、
 哀れな農村の記録を作り、研究する人の涙を誘
 います。

松浦越之(鶴見所)の、ふちとの大きなため池
 を苦心して、作りあげたけれども、二十五町歩
 灌漑の計画は、わずかに八町歩にとどまるとい
 う結果になりました。大野は砂礫層の扇状地で、
 水が地下にしみこむのです。工事費の負担は堪
 えかねた人々は、田を手放したり、高利貸に借
 り換えたりしましたが、一時は、全くどぶ沼の
 中に沈んだようになりさまでした。幸いに、農
 村のその後の経済状態の好転によつてきりぬけ
 ました。

最近、米水津村に流れる川を、浦代峠の向こう側でせき止め、人の通るトンネル（浦代トンネル）を利用して、木立側に水を落とすとして、ため池の水と合わせて、十二町歩に灌漑できるようにしました。

先日、実地に調査した私は、その思いつきのよいので感心しました。

取り入れ口で、水を少し感ぜりすぎて、浦代トンネルの入口に所つた家を、洪水の時に流したのば、一考を要すると思いました。

木立村は、ほとんどすべての灌漑標式（谷水・天水・ポンプ・ソルベ・ツキヌキ）を持っている珍しい土地です。つまり灌漑について一番苦心した村といえましょう。

切畑村の石内のため池は、更に堂々たるものですが、洪水の時、一度こわれて家を流したそうです。大野の貯水池と違つて、位置が人家の上にある、危険だと思えます。

このようなお話は、それぞれ地域で調査されたら、たくさんあることでしょう。

ホ、掘抜井戸

変わった灌漑の方法は、池船や津志河内や小島の掘抜井戸でしょう。静かに美しい水が管からふき出しています。

このあたりは、用水路の水がとどかず、川は海水が交じりますので使用できません。

地下水の利用とは、よい思いつきでしょう。どうして、仏とりに水が出てくるのでしょうか。砂と粘土の重なつた地下を想像してください。

粘土は水を通しません。そして、これらの層

は、河上に向かつて高まり、ついには川底に続くのです。それで、砂の中に含まれた水は、河水による水圧が加わるわけで、ちようど、水道の出口と水源地との関係そつくりでしょう。私たちが祖先は、いつの間にかこんな事も知つていました。

ヘ、その他

海岸に近い扇状地帯の三角州には、谷の出口に水田が発達しています。

また、浜に近い所で、扇状地をくぐつた水のあく所にも水田があります。ちようど水田・畑・水田と三地帯になるわけです。

しかし、岩護屋の野々河内や丸市屋等には、海岸沿いに水田がありません。

蒲江の東側や、津井（上蒲所）では、特に潟を埋めて、広い田にしています。

津井は、やはり小林九左衛門（上野村鬼が頼井梅調さく者）の開拓した所です。

女島・長島は、畑の間に一段低くなつた水田があります。雨水で植えつけますし、その後にも全く雨水による地域で、灌漑設備の無い所です。年によつて、旱害を受けるのは、やむをえないでしょう。四五年前、ほとんど植えつけ不能になつたことがあります。

中村付近では、市街から流れてきた水を田に引いています。

桃谷川は排水用のみですが、雨の少ない年には、すつかりせき止めて用水の不足を補っています。

これらの地域は、安定した水田を持たないと

いふべきでしよう。

台地や丘陵の間に、細い水田が木の枝のよう
に分かれて入りこんだ小野市や重岡でも、旱害
に甚しみます。

これらは、灌溉用水路を設けることのできな
い地域です。それで、しぜん台地のへりにあく
地下水を利用するので、冬は湿田になつて麦が
作れないし、雨の多い年は、秋じゅう田がかわ
かず、そのうえ、梅雨がきても、雨の降らない
ときは旱害を受けるのです。南田原や酒利はそ
のよい例です。

しかし、真らでは、水立村の大野のようには、
桑原川に出るはずの、天神原の高原から流れる
川をせき止めて、反対側の真らに落としました。
西山三十戸が、一種の親母孔を結び、当たつ
た家には必ず二人役づつ加勢するのです。六十
人役をうまく使うと、谷間々々になり、水田
ができたそうです。やはり、この地方も、畑を
水田に換えた歴史を持つてゐることを知りまし
た。

水田をつくるために、労力を求めた方法は、
なかなかおもしろいと思ひます。

(以上)

「大野溜池」(佐伯市木立)についての、川柴弘氏の随
筆を紹介いたします。(昨年初夏の頃、大分合同新聞「野」による)

先日午後、気の合った友人と四人で、水立から松
浦への峠道を歩こうということで、松浦越というバス
停で降りた。(中略)

突然、目の前に、満々と水をたたえた堤があらわれ

た。大正のころ築かれたという大野のため池である。

(中略)

一体どれほどの人力を要したものであろうか。ブル
ドーザーやダンプロカーの機械力でなくて、村中総出で
せいせい大八車か人々の肩ではこばれた岩石をこら
し、運んだ土を千本つきをして固めた堰堤である。

あたりを見まわしたが、どこにもよくある記念碑が
見当たらない。いつ、どのような願いで、このため池は
構築されたものであろうか。

耳をすますと、かすかに水の音がする。いぶへ水せ
ん骨き導水管)から、この堰堤の下を水はくぐり、目
の下の水田にそそがれている。(中略)

それだけ早真打どつて、私たちは峠道へと戻ると
すめ方のであった。(後略)

佐伯市久部(旧上堅田村)に、三つのため池(通称篠崎
公園)があります。

一 我輩南上堅田村大字池田字久部、古来水利ニ乏シ、
昭和八年(一九三三年)初メ清六池ヲ鑿ル。浚田二所
余。文化十五年(一九二八年)又一大池ヲ清六ヨリ設
築ス。田二十一所余ヲ浚グ可シ。三池ノ利既ニ頗
ル豊カナリ。明治二十九年有志相謀リ、清六池ノ
堤ヲ増築ス。高廿六尺ヲ加フ。(中略)
鳴呼其二三池ノ設ケ無シ、何ゾ以テ浚流ノ利ヲ究
ムス。(下略)

と刻まれた、ため池の記念碑が、篠崎公園に建立されて
います。

佐伯市蛇崎にも大きなため池があります。それにちな
んで「増天富」(天富ヲ増ス)と刻まれた記念碑が建て

られています。

「大分県南海部郡上堅村宇蛇崎ハ佐伯城市ニ僅カ拾余町、地勢久部山ノ東方ニ斗出シ、番五堅田ニ川ノ下流ニ枕ミ、通ク木立村宮ヶ崎ニ対シ、城市ヨリ角道ニ至ル水路ノ門口ヲ扼ス。境域坦ニ且ツ広シト雖モ古未池溝ノ設ケナク、灌漑ノ便甚ガ乏シ。

今ヲ距ル三十余年前ハ水田ノ有ル者ハ僅カ拾五町余步ニ過ギズ、而シテ之ヲ耕ス皆天水ノ利ニ頼ラサル無シ。村民深ク之ヲ憂フ。

明治十二年柳談ジ、一池ヲ水口原ニ鑿リ、以テ灌漑ノ用ニ備フ。

爾後漸ク壆田ヲ増シ、用水復不足ヲ告グルニ至ル。世ヨリ再ビ相議リ、補助ヲ果費ヨリ得、池堤ヲ増築シ高廿六尺ヲ加フ。貯チ以テ蓄水ヲ大イニ増スヲ得ト雖モ、其ノ量ヲ給用スル猶イマダ豊カナラズ。無雨ノ年一過スレバ旱害ヲ恐ル能ハズ。(後畧)

佐伯市龍護寺にも、蛇濟と同じような、大きなため池があります。

柳土の先輩の方々が、いかに水田作りに奔走されたかを、記念碑によつてうかがい知ることができます。先人のご苦労に深甚な敬意を表しましょう。

石井範夫氏(秋保新教育委員)の「山田の耕作」の一部を紹介いたします。

自宅から二畑離れたところ、まわりきク又ギ林にかこまれた谷間のかたわきに、私夫妻夫婦の耕作する田んぼがある。

今更遠く明治の昔、貧しかつた私の祖父母が、近くの山あいからしみ出すわずかな流れ水をたよりにして

原野を掘り起こして開田したものの。クワとツルハシ・モッコだけのも具で、何年かかかつてつくりあげ、そのあとを父がうけつぎ私にわたつたおるまで九十年間、親子三代にわたつて、土と土に長く干成つて研えきて苦難の足跡が耕地のすみずみにまで、深く刻みこまれてゐるだけに、離れがたい愛着をもつ。(後畧)

昭和四十六年、米の生産調整のため、休耕奨励補助金制度が実施されて以来、水田の一部は荒れ放題になつて

その休耕奨励金も、昭和四十九年度以降打ち切られることになりました。

他方、専業農家は減少し、兼業農家は増加の方向にあります。また、農業就業の女性化(かあぢやん)、高齢化(いぢやん・ばあぢやん)——いわゆる三才やん農業——が進行しつゝあります。

世界的な農糧危機・米価、農業の省力化(機械化)、農薬、化学肥料、生産意欲等々の問題もあつて、今後の農政は、ますますむづかしい事態を迎えようとしています。(一づく)

本会顧問 高野喜助氏の訃

佐伯史談会発足以来の会員で、後長老として顧問に推し、長らく会の御指導をいただいていました高野喜助氏は、昨年夏以来静養されていましたが、薬石効なく、暮の十二月十四日夜、遂に永眠されました。享年七十九才でありました。

葬儀は十二月二十八日菩提所海福寺で執行、会員多数の参列があり、故人の経歴も、交友の広さから会葬者が多く盛葬でありました。尚二ご家庭にはお母さまがご存じます。(佐伯市賜玉御自宅居住)